
六丁目の嵐

犬山健介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

六丁目の嵐

【Zコード】

Z6010M

【作者名】

犬山健介

【あらすじ】

社会のどんにも居場所を見つけられない若者たちの喜怒哀楽と
中高年の悲哀。

酔いどれ女の悲劇が台風の日になって、
あなたの六丁目に嵐がやってくる。

六丁目の嵐

犬山健介

1

雨はますます激しさを増していた。

田所清一は、店長の蒲生浩平に頼んで傘を一本用意してもらつたが、女は立つのがやつとの状態で、ひとりではまともに歩くこともできず、結局清一が、ひとつ傘の下で彼女のノースリーブの肩を抱きやせえてやらなければならなかつた。

コンビニの店の前の駐車場で、オートバイを何台か停めて、あたり照明の届かない薄暗い隅っこに雨宿りしていた数人の若者が、さつきから興味深そうに、少し危険な目つきでじつとこちらを見ていた。

清一は、なるべく彼らと目を合わせないようにしながら、困り果てたような顔で蒲生浩平にささやいた。

「でも、いいんですかね、ぼくの部屋で。そりや、他にだれもいませんから、朝まで気兼ねなしに寝ることはできるでしょうよ。しかし、部屋は散らかってるし、布団だって、ぼくのしかありませんからね」

「いいもあるかい、まあ

早く行けよというよう、「蒲生はやはり若者じの田が気になるのか、小さく手をふつて言った。

「本人がいって言つてるんだから、それでいいじゃないか。とに

2

かく、店の前で寝転がっていられたんじゃ、危なっかしくていか

ん。ほんとうは警察か救急車を呼ぶべきなんだろ？が、ま、このひとにも世間体つてものがあるだろうからね。その代わり、部屋で寝かせたら、すぐ戻つて来いよ。あんまりゆづくらされると、また、べつの心配をせにゃならんでな」

「なんですか、べつの心配つて

「いいから早く行けよ

「そんな心配があるんだつたら、店長が連れてつてださこよ、部屋の鍵を渡しますから」

田所清一は、急に顔が熱くなつて、怒つたよつた。ちゅうと油断するとすぐ倒れそうになる女は、すでにずぶぬれの状態で、むき出しの肩の肉がつるつるすべるのでつた。

『このぶんじや、シャワーも使わせないわけにはいかないだろ？けど、いやだなあ、あそこだけは他人に入つてもらいたくないなあ』
彼がこんなことを考えてひとりでドキドキしていると、蒲生浩平は急にこわい顔をして彼の頭をコツンと小突いた。

「なに言つてやがる、おれには店の仕事があるじゃないか

「店の仕事なら、ぼくだつて……」

「いいか、おい、この店の店長はおれだ。アルバイトだつとなんだろうと、おまえは部下だ。わかるな。わかつたらつべこべ言わずには早く……なに？ それがどうした？ 関係ない？ 関係ないとはなんだ。おまえなあ、そういう言い方をするから、いつまでたつても就職が決まらないんだ。いいから早く行つてこい。これは命令だ。第一、この女をなんとかしなきやつて、最初に言い出したのは、おまえじやないか

女がよろよろするので、田所清一のまつも右に左にふりついて、まるで一人とも酔っ払つた恋人同士のようになつた。もっともそれは、彼の体力ではこのボリュームのある肉感的な女の身体を支えるの十分でないせいもあつた。雨宿りしていた若者のだれかが、それを見て、挑発するように鋭く口笛を鳴らした。ヒヒヒと下品に嗤う

者もいた。よせよ、ほつとけ、と仲間を諫める声もかすかにだが聞こえた。いつたん店のなかに入った蒲生浩平が、びっくりしたよう

に飛び出してきて、傘も差さずに一人の前に立ちふさがった。

「やつぱり、どうだらうね、警察を呼ぼうか、それともやつぱり、救急車のほうがいいかな。本人がいやだと言つても、こっちの立場もあるし、それにやつぱり心配なんだよ。いや、おまえのことを疑つてるんぢゃないがね。しかし、相手が相手だらう、こんな……いや、その、大酒食らつて意識も朦朧としているような女がだよ、それもまあ、店によく来てくれるお客さんにはちがいないが、一日か一日に一回、パンと牛乳と、それからたばこを買いに来るぐらいなもので、ほとんどの口もかわしたことがないような女がだよ、どうしてまた、急におまえの部屋に泊めてくれなんて言い出したんだろうねえ！　なんだか、わざとらしいぢゃないか。え、あとで面倒でも起こりやしないかね！」

「つるわー！」

意外なほどはつきりした声で、女がふいに叫んだ。それがあんまり彼女の色っぽい印象とかけ離れた声だったので、後ろのほうで大笑いが起こり、蒲生浩平は畳然として立ちすくみ、田所清一はクスクスと笑つた。

アパートは店の裏手のすぐ近くにあり、歩いても五分ぐらいなのだった。それでも雨のなかを苦労して歩いてやつと部屋にたどり着くと、田所清一は部屋の電気をつけて、少しおろおろしながら女に言った。

「いや、いいですよ、どうぞどうぞ、遠慮なく使つてください。風邪でもひいてはたいへんですから！　しかし、あなた、ちゃんと入れるんでしょうね。またさつきみたいに倒れ込まれても、ぼくはなにもしてあげられませんよ。それに、ぼくはすぐ店に帰らなきゃいけないんです。あなたが風呂からあがるまで、待つていられませんからね！」

彼は言つだけのことをして、すぐ部屋から出て行つた。

知らない女をひとり残して、不用心ではないかという考えは少しも起こらなかつた。彼女がこのまま泊まつていこうと、あるいは途中で気が変わつて部屋から出て行こうと、それも彼にとつてはどうでもよいことだつた。ただ、万年床の薄汚れた布団だけはあまり使ってほしくなかつた。それから、彼がまだそこにいるのに、浴室の前で濡れたピンクのブラウスのボタンを三つも外した恰好で、「ねえ、ちょっと、タオル！」と大声で怒鳴るのには少々腹が立つた。もつとも、彼がわざわざ押入から新しいタオルを出してやると、女はペコりと頭を下げて、ごめんなさいね、と低くつぶやき、少し反省したようにじつと彼の目を見つめるしおらしさも見せた。

「いいですか、ドアの鍵はぼくが外からかけていきますが、あなたは気にすることはありませんよ」清一はすぐに顔をそむけて言つた。「出て行きくなつたら、いつでもかつてに出て行きなさい。鍵をかける必要もありません。なあに、こんな部屋に入る泥棒なんていませんからね！」

最後の注意のようになつて言い捨てるど、彼はちょっとなにかにつまづいて「トーンと大きな音を立てながら、玄関の狭い土間に降りた。何か言い残したような気がしないでもなかつたが、後ろではもう、服を脱ぐ気配がしているので、一度止めた手を再び動かし、急いで靴を履こうとした。

そのときふいに、だれかが、これも乱暴な大きな音を立てて、ドアを外側から立て続けに数回ドンドンと叩いた。最初はいきなり叩かれたと思ったのだが、その直前にドアの外でなにやら小さな物音がしていたのを、清一はとつさに思い出した。彼はぎょっとして、ほとんど反射的に後ろをふり返つた。しかしその瞬間には、今、女が脱衣中であることや、もしかしてこの無礼なノックの主はこの女と関係があるのでないかということが、ほとんど同時に彼の意識をとらえていた。彼はやはり、ふり向くべきではなかつた。一瞬、燃えるように顔が熱くなつた彼は、あわててドアのほうに向き直り、なおも騒々しくノックする不届きな相手に、少しうわすつた声で、

むしり恐る恐る返事をした。

「ああ、じゅら、田所さんのお宅でしょうか？」

「その声は意外と落ちついていた。

「さっき店の方から、じゅらだとうかがったんですがね……」

それも若くはない、中年の、あるいはもつと上のよつな声だった。清一は、別に警戒するほどのことないと思つて、すぐドアを開けようとしたが、するところなり後ろから襟首をグイッと引っぱられて、思わずバランスを失い、どしゃんと尻餅をついた。いつのまにか女がすぐ後ろに来てい、彼の尻餅などどうでもいいといった様子で、じつと、食い入るようにドアを見つめていた。その心配そうな蒼い顔と、そそのかすよつなブラジャーの紐が、彼の目を交互に強く射た。

「いないと言つて、お願ひ、わたしはいないと言つてー。」

彼女は両手を合わさんばかりにして、清一の耳元に小さく口走つた。彼は耳がくすぐつたくて、彼女の言つていることがよくわからなかつたが、それでもすべてを了解したよつな気になつて、ドアを開ける前に半裸の女を浴室にかくまい、彼女の靴を万年床のなかに投げ込み、それから、ええつと、それから……などとつぶやきながら、玄関のすぐ近くに落ちていたハンドバッグと、浴室のドアのところに脱ぎ捨ててあつた女の衣服をこわごわ指につまんで、これも万年床のなかに隠すことを忘れなかつた。

「いや、あの人なら、もう帰りましたよ、ええ、つこさつき」

彼はゴクンと生睡を呑み込んで、ドアの向こうに現われた、背の低い、頭のつぺんがきれいにはげた五十がらみの男に向かつて言った。

「やつぱつじゅら、なんでしょう、男ひとりのむさ苦しい部屋ですからね。最初は泊まるつもりで来たものの、一旦見て嫌気がさしたんでしようよ。おっしゃるとおり、ぼくは、店長から泊めてやれって言われましたし、第一、あんな状態ですかね。少し酔いが覚めまるまで休んでいったほうがいいですよつて、一応は止めたんだけど、

あの人つたら、ありがとうも言わずに行つちまいましたよー。」

男は顔をしかめて、黒縁の眼鏡の奥からじりりと清一ににらんだ。しかし、清一が気を取り直して負けずににらみ返してやると、その目が一瞬揺らぎを見せてよそへ逃げた。それから一度だけ、男はドアの内側に首を突っ込んで、狭いキッチンの向こうに三分の一ほどのぞいている部屋の様子を、さぐるようじっと見つめた。もつとも、彼が探している女は、手前のすぐそこの、浴室にいるのである。清一はこのときになつてはじめて、室内にいつもどちらがう濃厚な匂いが漂つてゐることに気づき、はつとしたが、男はむしろ円満な、人のよわよわな笑みを浮かべて、「いいかね、きみ!」と変になれなれしく話しかけてきた。

「捨て場所もわからないまま、不幸を背負い込んでいやいけないよ。不幸つてやつはいつだつて、同情と手をつないでやつてくるんだ。ところが同情のほうはただの氣まぐれで、あとに残るのは不幸だけつてわけさ。よくあることだよ。だまれちゃいけないな」

「はあ」とだけ清一は答えた。おおかたこいつも酔つてるんだろう、と思つた。まだ何か言つてくるかと思つたその男は、足元の廊下にペツとつばを吐くと、さすがに強引な真似はしかねたらしく、そのまま帰つて行つた。ところが階段まで遠のいた足音が、またためらいながら戻つてきそうになると、清一はあわててドアを閉め、鍵をかけた。

とんだことで店に戻るきつかけを失つた清一は、かくまつた浴室の中でのままシャワーを浴びだした女をどう扱つたものかと考え、しばらく散らかつた狭い部屋のなかをうろうろした。このままにして出かけるのはやはり不安だし、女にとつても危険な気がした。かといって、すっかり安心して浴室から出てきた女に、「あら、まだいたの」と笑われそうなばつの悪さが、ときとして彼を赤面させたり、用もないのに狭い部屋のなかをいつまでもうろうろさせたりするのだった。十分くらい、彼はそうしていた。さつきの男がまだ通路にいるかも知れないので、今出て行くのはやばいといつて用心

もはたらいでいた。もっともそつやつて待っているあいだに、彼の注意はもつぱら浴室から聞こえてくるシャワーの音ばかりに向けられていたのだった。それで、ふいにだれかが、ドアの外から鍵穴にキーを差し込む音がしたときは、いつぺんに全部の防護壁が決壊したような衝撃を受けた。

相手はまるで自分の部屋のように手慣れた感じで、彼が制止する暇もないまま、さつとドアを開けた。てっきりあの男が飛び込んで来るどばかり思った田所清一は、意外にも須田芳枝の姿をそこに認めて、かえつて呆気にとられてしまった。須田芳枝は、すました顔で部屋に入ってきて、ぬれた傘をわきに立てかけた。それから靴を脱ごうとして後ろに曲げた足に片手をやつたとき、ひょいと顔を上げてまともに清一と目が合つた。その目が仰天したようにむけひろがつた。清一はどう言つていいかわからず、彼女のほうでも挨拶さえ忘れた様子で、しばらく無言で、お互ひが目の奥を探り合つた。

『なんだよ、きみ、どうしてだい！』

『あら、あなただつて、仕事はどうしたのよ…』

自然とこういう会話と照れ笑いに落ちつくはずだった二人の予感は、しかし、浴室から聞こえてきた賑やかに水の飛び散る音で瞬時にはじけ飛んでしまつた。須田芳枝のアクセントの強い大きな目が、このときますます大きくむけひろがつた。清一も冷や汗が出て、胸がドキドキし出した。

「誤解しちゃだめだよ。これはね、ちがうんだ」彼は苦しそうに言った。「話せばわかる。蒲生さんだつて、証人になつてくれるさ。でも、ぼくはきみの裁きにしたがうよ。納得がいかないというなら、ことん話すよ。それでも許せないつて言うんだつたら、地べたに土下座してでも謝るよ（謝ることなんか、なにもないけどねー）。これはまったく、偶然が偶然を招いた、運命のいたずらってわけさ。まったく、くだらないつたらないよ！　だけど……だけどこのいたずらつてやつは、一滴でも誤解が混ざると、たちまち運命そのものを変えてしまうんだからなあ！　いいかい、頼むから、いつものき

みでいてくれよ。出て行っちゃダメだよ。ぼくはこれから店に戻るけど、きみはここに泊まるんだ（でも、きみ、今夜はえらく早いんだね！）。それにしても、きみがぼくの部屋の合い鍵を持つてたなんて、こんなすてきなことはないよ。どうしてぼくに、それがわからなかつたんだろう！これこそぼくの罪だったね。だから謝るよ。反省するよ。きみの奴隸になるよ。未来を誓うよ。だから、だから……お願いだから、そんなに、聞き耳を立てないでくれ！」

「のぞいてるわよ」須田芳枝は小さく、しかしどがつた声で言った。「ほら、布団の下に……なんなの、あれは。まさかわたしへの当てつけじゃないでしょ。これじゃ一滴の誤解どころか、洪水だわ！ええ、大洪水よ！でもわたし……かえつてうれしくなりました。うれしくてうれしくて、胸がふるえるほど……だってもう、わたしがあなたのことで悩むことなんかないってことが、はつきりしたんだもの。わたしはわたしで、自由に生きていけばいいんだってことが分つたんだもの。あなたがそんなにお利口な人だと分つていたら、わたし、きっと別の人に対するかされて、とっくにあなたと別れていたと思うの。ええ、そよう。もうなんの未練もないわ。むしろ清々した気持ちで、心おきなく、あなたにさよならが言えそうよ！」

須田芳枝のつぶらな眼に涙が光った。田所清一は微笑みかけたまま茫然となつて、そこに立ちつくした。

首を長くして待つていたとしか思えないくらい一人で店のなかを忙しそうにうろうろしていた蒲生浩平は、戻つてくるのが遅いといつて、清一を叱つた。清一のほうはそれどころではないほど気分が沈んで、まともな返事すらできなかつた。土砂降りの雨は次第に小降りになり、その夜のうちに止んだ。清一は外がすっかり明るくなるまで、彼と一言も口をきかなかつた。彼があの女のことを気にかけて、何度も質問してきても、黙つていた。時間が来て、ローテーシヨンの引継ぎを終えて帰ろうとするとき、彼ははじめて蒲生浩平に視線を向けて、「だからやつぱり、あなたが連れて行くべきだったんですよ、僕ではなく、あなたがね」と今さらのように恨みがまし

く言った。蒲生は、ピクピク顔をふるわせて、「おい、それはどういうことだ。何かあつたんだつたら、おれにも聞かせてくれたつていいじゃないか。え、あの人は弁護士だと言つて、おれに名刺まで見せたんだよ。おまけにあの女の亭主だつて言つじやないか。おれはただ、すべきことをしたまでだよ。つまりそれがおまえには、気に入らなかつたつてことか?」と早口でまくし立てた。

清一は黙つて、そのまま彼と別れた。蒲生が心配そうにあとから追いかけてきて、朝食でもおごろうかと誘つてくれたが、とてもその気になれなかつた。しかしその後、アパートへ着くまでのわずか五分の間に、彼の心に予期せぬ奇妙な変化が起こつた。もつともその変化の原因は、昨夜来、彼の頭にずっとこびりついていたことでもあつた。彼は急に晴れがましいはつらつとした気分になつて、少しふるえだした手でズボンのポケットから鍵を取りだしたが、案に相違してこのとき部屋のドアのロックは外れていた。それから、恐る恐る中を覗いてみると、いつもわきべずれて波打つている万年床の布団が、このときはすつきりと、部屋の真ん中に平べつたく整えられていた。彼の気分がこれまでまた変つた。枕元に伏せてあつた小さな紙切れは、一瞬彼をどきまきさせたが、それにはただ簡単に、『ありがとう、加奈子』と書かれているだけだつた。

運の悪いことに、その紙切れは、昼過ぎにやつてきた妹の美穂に見つけられた。彼女はそもそも部屋に入つたときから、いつもとは違う種類の濃密な、ある種危険な匂いがするのに気づいたらしく、「なに、この匂いは!」と少し大げさに叫んだほどだつた。それからまつすぐ枕元までやつてきて、坐りこみ、かすかに紙切れを取り上げる音をさせて、しばらくおとなしくしてゐた。寝たふりをしたまま、また何を言い出すかとどきどきしていた清一は、やがて彼女がその紙切れを丸めてポイッと「ゴミ箱に投げ入れる音を聞いて、片方の耳たぶがかつてにぴくつと動くのを感じた。妹とはいえ、それは許せないぞ、と思つて、いつ目を覚まそうかとタイミングをはかつていると、ふいに、目をつぶつたままにしているその額を、指の

関節でコソコソとこづかれた。

「火事だあ！ 火事！ 火事！ だれかが火をつけたわ！ いつそ消防士になつたらどうなの。まさか採用通知まで燃えてないでしょうね！」

清一はこのかわいらしい医学生を、内心では少し恐れていた。けれども一方では、どこか小馬鹿にしていた。彼はおもむろに眼を開くと、『ごそごそと布団から這いだして、ゴミ箱の中をあさつた。そしてしわくちゃになつた紙切れを大事そうに引き伸ばしながら、また布団に戻ってきて、それを妹の目の前で何食わぬ顔をして枕の下に隠し、薄い布団の中に自分も隠れた。

「呆れたわね。やつぱり今度も駄目だったの？」

「まだ分らないよ」彼は布団の中から答えた。

「じゃ、新しい人のほうはどうなのよ。その紙切れのひと。今度もまた、わたしに紹介してくれるの？」

「おまえのほうはどうなんだい、権田浩史のことをどう思つてる？」

ほんのわずかなあいだだが、このとき、美穂の言葉が途切れ。続いて聞こえてきた声も、それまでとはがらりと調子が変わつていた。

「わたしね、そんなに早く自分を固定したくないのよ。権田さんがどうのこうのつて言うんじやなくて、もっと、色んな可能性に挑戦したいの。たとえば、兄さんみたいに」

「それは悪い傾向だね」すかさず彼女を遮つて、清一は布団からひょいっと首だけ出した。「僕はしそつちゅう追い立てられてるよ。可能性に挑戦するなんてとんでもない。自分では早く適当に身を固めたいのに、どこにも行き場がないんだからなあ！」

同じように行き場がなくて困っている男が、このときずかずかと部屋に入つてきて、寝ている清一には目もくれず、一言二言、美穂に挨拶した。美穂もそれに答えたが、二人ともその声は変にそわそわしていく落ち着かなかつた。「病気ですか」と権田浩史は、恐ろしく真面目くさつた神妙な口調で、このときも清一にではなく美穂

に尋ねた。美穂は肩をすくめて「ふと、清一はふと、昨夜あのまま別れた須田芳枝のことを思い出し、急にいても立つてもいられないなって、がばと布団から跳ね起きた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6010m/>

六丁目の嵐

2010年10月10日18時54分発行